76　「五常訓」は政宗の作かどうか

問　五常訓は伊達政宗[1]自身の作ったものでしょうか。そうでないという人もいますが、本当はどうなのでしょうか。

答　五常訓と称せられるものについては、伊達氏に関する記録文書のどれにも、根拠となるものが見当りません。従って、数多く公刊されている政宗関係の著作でも、五常訓をとり上げたものは極く少数に限られ、「伊達政宗公」（斎藤荘次郎、大正１４）、「伊達政宗」（渡部義顕、昭和９）、「仙台市史」（仙台市、明治４１）、「仙台士鑑」（矢野顕蔵、明治３３）、「松島大観」（山下重民、大正２）に見ることができるぐらいで、しかもいずれも、その出所や年月等を記していません。政宗という人物は余りにも偉大であっただけに、後世になって日本人的心情から発する幾多の英雄伝説が生み出され、虚像附加がなされている面があります。これらに照明を当てることは、決して政宗についての評価を引き下げるものではなく、むしろその偉大性を物語る所以と考えるべきことであります。五常訓も添加物の一つで、いわゆる俗説としては通るが、資料的裏付けがありませんので、歴史的事実としては否定されることになります。

伊達家史料に最も精通していた作並清亮が「鳳泉随筆」中に、次のような五常訓捏造説を記しています。『藩祖公の遺訓なりとて伝ふるもの[2]のあり、其子孫にはかならず伝ふるものならんに、予三十年来伊達家史料編纂に従事してその記録古文書類大かた見尽したれど未だその遺訓は見当らざりし。其遺訓の印刷に上りしは明治二十七年好古叢誌第三編八の巻の漫録に「仙台黄門政宗卿遺訓」[3]と題して

仁に過れば弱くなる。義に過れば固くなる。礼に過れば諂となる。智に過れば嘘をつく。信に過れば損をする。気を長く心穏にして萬に倹約を用ひ金を備ふべし。倹約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり。此世に客に来たと思へば何の苦もなし。朝夕の食事のうまからずとも誉て食ふべし。元来客の身なれば好き嫌ひは申されまじ。今日の行おくり、子孫兄弟によく挨拶して娑婆の御暇まうすがよし。

とあり。禅家悟道の意味あるに似たり。編者にその出所を尋ぬれば詳ならずといふ。さて理斎随筆[4]に「理斎は志賀忍の号」水府義公御染筆の一軸なりとて左の文を挙げたり。

仁すぐればよはくなる。義すぐればかたくなる。礼過ればへつらひとなる。智過ればうそをつく。信過ればそんをする。気は長く、勤はかたく、色うすく食細ふして心広かれ。

と見えたり。又好古漫録全十二巻、著者詳ならずに「閑通和尚座右銘」と題して夫〔それ〕人は此世に客に来れりと思はば世話も苦労もなし。心に叶ひたる食に向ひては能〔よき〕馳走と思ひ心に叶わざる時も客なれば誉て喰ねばならず。夏の暑さも客なればこらえねば成らず。冬の寒さも客なれば堪忍せねばならぬ。兄弟子孫も猶以て相客なれば挨拶よく暮し、気にあはぬ事ありとも客なれ

ば笑ひ何事も心能くくらしあとに心残さず暇もうすべし。
父母に呼れて仮に客に来て心残さず帰る故（ふる）さと。
閑通和尚は何れの時、何れの処の人なるを知らず。和尚の言葉としてはいかにも相応なるべし。さるに或る書に此の文を「水戸黄門娑婆の掟」と題して載せたり。依て先年この二編を写して水戸家の家扶に尋ねしに、記録も見えず、また口碑にも伝はらずと答へられたり。されども此二章は能く一篇の章をなせしかど、藩祖公の遺訓といふはこの二篇をとり合せ強て作れるが如く見ゆるなり。章法始終貫通せず文章の体をなさざるを如何にせん。おもふに両黄門は希世の名君なれば、其人の性行気象を写さんが為に捏造したるものにあらずや。世に伝ふる彼の豊太閤が明王の日本国王に封ずといふ封冊を見て目を瞋らし封冊を取て寸裂す、又井伊直孝が家康公より政宗公に賜はりし百万石の封信を手裂して火に投じたりといふ。されども其封冊は現に華族石川氏に、百万石の印信は伊達家に存在していささか毀損なきを見れば捏造の言なるべし。藩祖公の遺訓といふも此類にあらざるなきや。敢て大方君子に質すことしかり。』

「仙台市史」第１巻にも否定説が示してあります。すなわち、『仁に過ぐれば」云々の謂わゆる貞山様遺訓なるものは、恐らく政宗の作ではないとの説がおこなわれていたが、三原良吉氏は「源貞氏耳袋」一ノ二二、四の二四の両条に、これと同じものが「水戸黄門光圀卿御遺訓」「紀伊中納言治貧卿御作」として挙げられていることを論拠として、源貞氏耳袋が編まれた幕末の頃までは、貞山公遺訓なるものはなかったと説かれた（三原「貞山様遺訓なるもの」仙台郷土研究（３の5）』

これがまた、林子平最期の言葉として伝えられてもいることは、全く驚くに堪えないことです。「仙台案内」（庄子輝光、明治２３刊）に『林子平が終焉の時病の床に筆把りて看護に侍りし姪日下久女に遺せる教訓に

夫れ世の中は客に来りしと思へは世話も苦労もなし。夏の暑さも客なれはたしなまねはならす。冬の寒さも客なれはこらへねはならす。心にかなはさる食物も客なれはほめて喰はねはならす。親子兄弟弥々以て合客なれは程よくあしらふへし。父母によはれてかりに客に来てこころのこさす帰るふるさと。』。これと同文のものが「林子平籠居詠草」（「六無斎遺草」の内）の伊勢斎助による「あとがき」〔昭和２年６月２１日付〕の中に記されています。これによって知られることは、まことしやかな附会が、子平にまで及んでいるということで、真否はもとより論外であります。

無責任な何者かの作為になる同上の既製作文が、情報伝播の緩漫な時代とはいえ、時により所に応じ政宗遺訓とも、光圀遺訓とも、治貧遺訓とも、子平遺訓とも銘打って商品化（書幅等）して流布され、今日もなお世を惑わしていることは以ての外のことであります。

なお、徳川家康の遺訓と伝えられるものに『人の一生は、重き荷を負うて遠き道をゆくがごとし。いそぐべからず。不自由を常とおもへば、不足なし……』というのがあります。これは、慶長８年〔１６０３〕１月１５日、家康が６２才の春にしたためたと伝えられますが、自筆のもの

はなく、「徳川実紀」をはじめ、正統な家康の伝記書等に記されていません。「戦国武将の手紙」（桑田忠親）にも『徳川家康の遺訓と称するものに、人の一生は重き荷を負うて遠き路を行くが如しというのがある。それから、また、啼かぬなら啼くまで待とうほととぎすという狂句も伝わっている。しかし、これらはみな、後の人が作りあげたもので、家康の作として信ずるわけにはいかない。』とあり、これまた俗受けした偽作の最たるものであります。以上の政宗・光圀・家康の遺訓といわれるものを合わせて「日本三大遺訓」と称して、商魂の材料に供せられているのを、最近方々で見かけますが、きわめて遺憾なことです。

注(1) 永禄１０年〔１５６７〕８月３日、伊達輝宗の長子として米沢に生れた。天正１２年〔１５８４〕家督相続、翌年父輝宗を謀殺した二本松の畠山を滅ぼし、天正１７年〔1589〕会津の芦名義広を征服し、会津一帯を手中に収め、やがて中通りの広大な地域を制圧した。２３才の青年武将政宗は、ここに伊達家始まって以来の黄金時代を築いたのである。しかし、中央における豊臣秀吉の全国統一が着々と実現しつつあり、翌年の小田原征伐遅参を境に、戦国英雄政宗の行動には、強力な制動がかけられる運命となった。天正１９年〔１５９１〕、秀吉の命によって蒲生氏郷と共に行った葛西・大崎一揆鎮圧作戦の間にも、政宗は巻返しのチャンスをねらったが、大勢の赴くところには抗し得なかった。この年、政宗は長井・信夫・伊達・田村・刈田・安達の６郡を悉く没収され、新たに大崎葛西の旧地を与えられ、９月２５日米沢から岩出山に移った。文禄・慶長の遠征に参加し、この間に秀次の反逆にくみしたとの疑いを受けたこともあった。秀吉の死後、徳川家康の勢力下に移り、徳川政権確立のために終始協力した。その後、北偏の岩出山から統治の中心を仙台に移し、今日ある仙台市の基礎を築いた。政宗は単に武将として抜群だっただけでなく、政治家としても数々の治績を残し、支倉常長を慶長１８年〔１６１３〕ヨーロッパに派遣するなど、スケールの雄大さをのぞかせている。また文化人としての一面も備えており、茶を利休に学んだこともあり、特に和歌にひいでた。寛永１３年〔１６３６〕５月２４日、江戸桜田邸で波瀾に満ちた７０年の生涯を終った。法名、瑞巌寺殿貞山禅利大居士、経が峯に葬り、その廟を瑞鳳殿といった。瑞鳳殿は桃山式遺風のある壮麗な建築で、第２代忠宗の霊屋感仙殿と共に、昭和６年１２月１４日国宝に指定されていたが、昭和２０年７月１０日の空襲で悉く焼失してしまった。その後久しく荒廃するままであったが、昭和５１年５月宮城県・仙台市その他の市町村から寄せられた浄財によって瑞鳳殿の本殿・拝殿が再建された。なお、政宗に関する伝記資料には、「伊達政宗卿伝記史料」（藩祖伊達政宗公顕彰会）、「貞山公治家記録」、「伊達政宗卿」（藩祖伊達政宗公三百年祭協賛会）、「政宗記」（伊達成実）、「伊達政宗」（小林清治）その他多くのものがある。

注(2) さくなみきよすけ。儒者。字は采卿、亮之進と称し、鳳泉と号した、清亮はその本名である。養賢堂に入り文武諸芸を修め、１６才でほぼその学業を卒えた。その後も専ら漢籍の

研究に努め、元治元年〔１８６４〕養賢堂指南見習に挙げられたが、やがて権指南に進み、塾長を兼ねた。慶応4年〔１８６８〕３月、奥羽鎮撫使が仙台に入り、養賢堂を本営としたので、養賢堂の教育は停止され、目付役に転じた。７月には一隊の将として二本松に出撃したが、９月１１日仙台は降服した。終戦とともに、戦犯の逮捕がしきりに行われ、清亮も追われる身となり、雲也と変名して諸方に転々潜伏を続けた。やがて情勢が安定してからは、仙台に立戻り、私塾を開き子弟を教えた。明治４年９月伊達慶邦の命により家扶に挙用され、「六代治家記録」〔全９１巻２２冊、第７代重村から第１２代斉邦に至る６代間の治家記録の総称〕の編纂に当り、邦宗の侍講をも兼ねた。明治７年「六代治家記録」完成。清亮は、伊達氏に関するあらゆる文書・記録を博捜し、数十種の名著を残した。「東藩史稿」「松島勝譜」等は特に広く読まれたものである。清亮は、伊達家に奉仕すること４０年、忠実精励、死に至るまで一貫して変ることがなかった。大正４年７月２１日、７５才で歿した。石名坂円福寺に葬る。

注(3)　中納言の唐称。寛永３年〔１６２６〕８月１９日、政宗６０才の時、従三位権中納言に叙されたので、このようにいう。

注(4)　「藩学と士風」（斎藤悳太郎）に『「理斎随筆」に載ってゐる光圀の五常誡句といふものがある。……果して光圀の作ったものかどうかわからぬ……』

資料　わしが国さ第６巻第９号（仙台協賛会）

仙台市史第１巻

仙台郷土研究第３巻第５号

77　「伊達」の正しい読み方

問　加美郡色麻村(1)にある伊達神(2)社を「いだてじんじゃ」といっていますが、「伊達」を「いだて」と読むのは正しいのでしょうか。

答　「伊達」を「いだて」と読むことについて「大日本地名辞書」第７巻（吉田東伍）、「伊達行朝朝臣勤王事歴」巻之１（大槻文彦）、「伊達家史叢談」巻之１（伊達邦宗）等に記載があります。それらによりますと、「伊達」は本来「いだて」と読むのが正しいとされています。もともと「いだて」という発音に「伊達」の漢字が当てられたものです。それが「だて」と読まれることもあるのは、「いまだ→まだ」・「いだく→だく」・「いでは→では」・「いばら→ばら」のような日本語の「脱い」音変化であるといわれます。